

# 永平寺の折々

前・永平寺副監院 池田好雄

春は花夏ほとぎす秋は月  
冬雪さえて冷しかりけり

これは「本来の面目」と題して詠まれた永平寺の開山道元禪師の作である。専門的な解釈をすると、さとりとか本来性とか、とてもむづかしいことになるが、この詩を、いやがうえにも一般的に有名にしたのは、恐らく、かつてノー

ベル文学賞を受賞された川端康成さんが、受賞記念講演をされたとき、その冒頭に引用されてからであろう。演題は「美しい日本の私」であった。そして二十六年後、同じノーベル賞が贈られた大江健三郎さんの演題は「あいまいな日本私の私」であった。大江さんは、この演題を選んだとき「私は川端と声をあわせて『美しい日本私の私』と言うことはできません」と言われた。

世界の文学を代表するこのお二人のテーマをどうこういうことは論外であるが、「春は花：」

の詩は、まさに永平寺の四季、あるいは禅の本來性を詠んで余すところがないように思われる。そして大江さんは、この種の引用はなかつたけれども、たとえば川端さんが禅をもつて語つたことと、大江さんを同一線上に、並べてみると、あの、あいまいな、とおっしゃる日本民族がたどつた破壊への狂信は、実は禅者の中にも、どれだけあるかわからぬ。

永平寺の禅とて、この埒外ではない。これを最も單純明快な言葉でいえば生死即涅槃であり煩惱即菩薩である。けれども、何が生死か、なにが煩惱かという見定めは禅者の力量による前に一つは、やはり永平寺の豊かな四季折々の表情から伺うことができる。

道元禪師は、春は花：と詠んだが、あの越後の良寛和尚は同じ筆法で、

形見とて なにか残さん春は花

山ほととぎす 秋はもみじ葉

と歌つた。これは亡くなる直前の詩といわれているが、辞世のうたではない。道元禪師の詠みかたをかりれば、やはり大自然の風光をうたつた「本来の面目」ではなかろうか。道元禪師も良寛さんも山住いであつた。春夏秋冬が際立つ山の居ずまいであつた。

現在永平寺の道場には百八十余名の修行僧がいる。早晚四時からの坐禅に始まつて夜九時の坐禅で終る一日ではあるが、禅の日々は二十四時間フル回転するというのが行持をつとめる基本的な認識である。つまり一日の終りは翌日のはじまりで、空白のまつ白になつてゐる時間は片時もないのだ。そういう行持の組みかたをしている。だから生活は流れる水のごとく、行く雲のごとく、つまり行雲流水の禅ぐらしというわけである。

禪の厳しさというのは朝早くからたたき起さ

れて坐禅し、禪堂で打たれ、先輩からどなられ、食事は玄米がゆで一汁一菜云々というのではなく、一日二十四時間の間断なき連続の中に没入していくことなのである。ここのこところが修行暮しの眼目なのだ。そして、これを完全にやり遂げることを行持綿密という。

もう二年ほど前のことであるが、私は、こういう場面に出あつたことがある。

永平寺は年に二回、それぞれ一週間づつ行なわれる法要、一つは四月の授戒会、十六条の戒法を受け血脉が授かる行事、一つは九月の御征忌、御開山道元禪師の命日である。九月二十九日までの七日間にわたる法要である。授戒会は

全国から大勢の曹洞宗檀信徒が上山して一週間に及ぶ行事をつとめ、また御征忌には多くの宗門宗侶が集まつて法要を營む。したがつて本山内の役寮、雲水は多忙をきわめ、まさに行持綿

密の一週間となる。

たしか御征忌が終つた夕方ごろ、種々の後片付けが終つて、上山していたご寺院は山を下り山内がほつと一息ついていた。私は役柄、行事法要が始まつても終つても、あたふたするのが公務であつた。寮を出て七堂伽藍の廻廊を山門へ向つてあたふたと歩いていた時、作務衣姿の一人の修行僧が山門にたたずみ、五代杉が林立する境内のほうに向つてじつと佇立している姿が目に入つた。私の足音をききつけた彼は振りかえつたかと思うと、「すみません」と合掌し、そこから立ち去ろうとした。近づいて声をかけると彼は目にいっぱい涙をためていたのだ。

恐らく仕事が一段落し、少なくとも、この一週間は、いかに谿声の風光といえども、それ题目をやるいとまなどなかつた。その夕暮の風光を眺めていたにちがいない。ここまでなら、ごく当たり前の、ああ終わつたという安堵感で外の



景色に目を移すことは、いくらでもある。しかし彼は泣いていたのだ。私には、彼の涙の中味が、わかるような思いだつた。まわりの風景が春であろうと秋であろうと涙には直接の関係はないのだが、この時の彼を涙にさそつてくれたのは、まさに五代杉とか、永平寺を囲む幽谷のたたずまいであつたはずである。「がんばれよ」と私は彼の肩に手をおき、ひとこと声をかけた。

道元禅師は傘松道詠のなかに、

峰の色 谷のひびきもみなながら

我が釈迦牟尼の声と姿と

と詠んだ。これは口づさんだ、その通りのことで山々の色、谿谷のひびきが、お釈迦様のお姿と映り、また説法の、み声として伝わつくるという。

しかし万人が万人、山や川の音を仏様のものとして見聞できるかといえば、そうはいかない。

夏目漱石の小説「虞美人草」に比叡山が出てくるが、会話に「高の知れた京都の山だ」とか、「恐ろしい頑固な山だなあ」とか、山登りをしている途中に「反吐へどが出そうだ」とある。また「二百の谷々を埋め、三百の神輿みこしを埋め、三千の悪僧を埋め、なお余りある葉裏に、三藐三菩提の仏たちを埋め尽して森々と半空に聳ゆるは伝教大師以来の杉である」というくだりもある。

峰の色：の描写とはかなりちがうが、それ

一つの見方である。道元禅師はあくまでも山水と一緒にであつた。山水が仏さまであつた。その禅風が今日に伝わつて、ここで修行する僧たちは古杉を見て涙し、山水の声を聞いて感動をおぼえるのだ。

その涙と感動の出どころはどこにあるのかといえれば、右往左往しながらも、ともかく行持を綿密にするところへ一步でも、半歩でも自分を近づけていこうとする日々の修行暮しが、そう

させるのである。

さとりとか本来の面目を自覚せよとか、日々の説法を受けても、試行錯誤することしきりである。そうこうするうちに頭がまつ白になつて、手抜きをすることだつて、どれだけあるかわからぬ。それを不如法というのだが、百名、二百名の僧たちが一人、一つづつ不如法したつて百ないし、二百の不如法になつてしまふ。その時に幽谷や老杉や山々が動いてくれるのだ、声をかけてくれるのである。

青山常運歩という禅語がある。青山は常に動いているという、へんてこな言葉であるが、永平寺の山々は、ここに道場があり、かりにたつた一人でも、二人でも如法なる修行僧がいる限り山は動く。そして山は説法をしてくれる。山内指導者の説法が理解できなくとも、山川の説法は聞こえてくるのである。

永平寺は四季の中で冬がまたいい。若者にと

つては一つのロマンの世界である。そして雪は修行の友であり勝友である。最近は、ここ数年、いわゆる暖冬で、なんとも物足りない思いをする。雪国の子供や、それから犬は雪をみるとはしゃぎ出す。私は雪国の生れ、雪国の育ちでありながら人一倍寒がりである。けれども雪はいい。山形の雪もいいが、永平寺のほうがもつといい。

「深雪三尺大地漫漫」という語録のことばもあるが、積雪の多いときは三尺などというものではない、昭和三十年代に入つてから豪雪に見舞われ、永平寺が孤立してしまつという危険なこともあつた。道元禪師の歌に、

冬草も見えぬ雪野の白さぎは  
おのが姿に身をかくしけり

というのがある。山川草木が、すっかり雪に覆われた白銀世界のこの寺に一羽の白鷺が飛んできた。ところが雪の白さと鳥の羽の白さがひ

苏井留图





とつになつて、白鷺の姿が見えなくなつてしまつたという意味の詠みである。「舍利礼文」のお

経にある入我我入の自他一如と同じ禪の境涯を示している。

我庵は越のしらやま冬ごもり

凍も雪も雲かかりけり

おやみなく雪はふりけり谷の戸に

春来にけりと鶯ぞなく

という歌もある。すべて御開山の詠んだもので、雪と永平寺、雪と道元禪師、そして雪と春、

というように、そのほか数多くの雪のうたが残されており、それがまた禪の説法になつてゐる。

永平寺の道場は、くりかえしになつてしまつが、山中に開かれ四季鮮明な、春は花から始まって冬雪さえて寒し、の大自然裡に抱かれているから禪の面目が保持されているといつても過

言ではない。

二十一世紀云々ということが少しづつ声高にきこえてくるが、二十一世紀は、それはそれでいい。今、永平寺は人力や文明科学の力をもつてしては造りえなかつたこの山と谷と水を修行のなかに、どのように仏様として頂戴するか、そして山の声、谷の声、川の声をどれだけ聴きとれるか、それが、あるいは二十一世紀へのテーマに引き継がれていくのではないか、そのよううに考え胸をふくらます思いをもつて、この永平寺を見つめている。

柳は装う觀音微妙の相

松は吹く説法度生の声